より豊かな礼拝を目指して

――奏楽者の視点から

浦沢如希

私は聖学院大学の卒業生でありまして、学生の頃から奏楽の奉仕をさせていただいておりました。学生の頃と言いましても今からもう二十年以上前のことになりますが、その頃と今とを比較してみますと、奏楽をする学生さんが少なくなったように感じます。同様に、学生の皆さんが賛美奉献する機会も、少なくなったように思います。当時私の周りには定期的に奏楽の奉仕をしている学生の仲間が幾人かおり、私の知り合いではない学生も幾人も奏楽をしておりました。現在の学生の数は、私が在籍していた頃よりもだいぶ多くなっていますが、それにも関わらず、奏楽奉仕者が多くないのは、どうしてだろうか……、と少し考えてみました。

礼拝の雰囲気が崇高で、格式が高く感じられてしまうからなのでしょうか。このチャペルが立派過ぎて、「自分は奏楽に向かない」と畏縮してしまうからなのでしょうか。（私が学生のときは四号館の四階で全学礼拝が行われていました。）「自分の得意とする音楽は奏楽に向かない」と考えているからなのでしょうか。礼拝にはクラシック音楽しか合わない、もしくは、クラシカルな音楽しかやってはいけないと思っているのではないか、とも考えました。

このようにいくつか原因を考えていくうちに、学生の皆さんが礼拝の奏楽や賛美奉献をしてみたいと思うように

なり、実際にそれがもう少しやり易くなったとしたら、もっと礼拝が活気づいていくだろうし、本日の主題でもある、「より豊かな礼拝を目指す」ことに繋がっていくのではないだろうかと思うようになりました。

先ほどクラシック音楽について触れましたが、私個人の意見としては、礼拝の中で演奏される音楽は必ずしもクラシック音楽でなくても良いであろうと思っています。音楽の各ジャンルには、成り立ちや背景がそれぞれにあり、それぞれに違った進化の過程を経て、現在に至っています。従って、音楽の各ジャンルには、成り立ちの違いによる独自の音楽の在り方やサウンド、楽器編成などがありますが、これは音楽の形式や様式の違いであって、価値の優劣ではないと思っています。クラシック音楽は文字どおり、他のジャンルと比較しても、とても歴史のある音楽ですが、広義において、コンテンポラリーな音楽として、現代に生きています。例えばおよそ三百年も前に作曲されたバッハの曲などが今も礼拝の中で使われたりしています。三百年もの間、歴史に淘汰されず、現代に息づいているコンテンポラリーな音楽として今も生き残っているのはとても凄いことです。かの有名な伝説的ロックバンドのビートルズでさえ、まだ五十年ほどです。

同じクラシック音楽の中で比較しても、長い歴史があり多様な歴史的背景や潮流があるため、三百年前の音楽形式と現代における音楽形式とは、全く違うスタイルです。一方、クラシック音楽以外においても、奥の深い音楽は数多く存在します。もちろん、スタイルは多種多様です。従って、クラシックとかロックとかジャズとかというようにジャンルとして括り、どのジャンルなら礼拝の音楽に相応しいかという議論は、成立しにくいようにと思います。

では、ジャンルを取り払い、新たにどのような観点から、礼拝で使われる音楽を定義したら良いのでしょうか。どこまでの音楽を許容範囲とするかという、（程度の問題に）非常に難しい問題がありますが、私からの提案といたしましては、多様性を持たせるために敢えて細かく定義せず、

①神様を賛美する心（気持ち）をもって、
②礼拝の雰囲気を損なわないような選曲をする。

たった二つだけですが、これだけを守ることによって、ジャンルに縛られることなく、より自由なスタイルで賛美奉献や奏楽をすることができ、多様性が生まれてくるのではないか、と思います。クラシック音楽でなければならないという固定観念に縛られることなく、音楽がより自由になることによって、多様な礼拝になり、変化が生まれ、結果的に礼拝が活気づくきっかけになるかもしれない、と思うのです。自由になり過ぎて、なんでもあり……、となっては困るので、それは先ほど述べたように礼拝の雰囲気を損なわない選曲を慎重にすべきであろうと思います。

もし、賛美奉献や奏楽をしたい気持ちのある学生がいるならば、そのことをチャプレンの先生方に申し出て相談したうえで、積極的に音楽で賛美することに挑戦して欲しいと思います。音楽で賛美するということは、音楽で表現することであり、会衆の前で音楽を奏でることです。それは学生にとり一つの挑戦となるはずです。人前で演奏することは多少なりとも緊張を強いられることになりますし、失敗しないために練習をすることになるはずです。その挑戦がその学生を成長させます。この意味でも、積極的に音楽での賛美に挑戦して欲しいと思うのです。その挑戦は一人でもいいでしょうし、複数の同志がいれば、有志という形で賛美奉献するのもいいでしょう。学生に限らず、教職員の有志でも良いと思います。実際に私は先日、有志の教職員で即席バンドを組み、賛美奉献をさせていただきました。そのときの形態は、トランペット、ベース、ドラム、ピアノの四人で、カルテットとして演奏しました。音楽のジャンルとしてはＪＡＺＺです。得意とする音楽ジャンルは、それぞれに異なっていましたが、折り合いの付くようアレンジして演奏しました。たとえば今の例のように、得意なジャンルが異なる人同士で、ある

一つの音楽に取り組むときや、自分が今までに演奏したことのないような音楽に取り組むとき、それは音楽において新たな挑戦となります。礼拝の音楽が、新しいものに挑戦するきっかけとなります。その挑戦を通して、自己成長することが大いにあり得るのです。

人前で音楽を演奏することは、特別な緊張感があり、その緊張が原因で、失敗することも多々あるでしょう。しかしこの失敗こそが、次なる挑戦を生み、それがまた自分を成長させることになります。練習不足も大いなる失敗を引き起こすことがあります。しかしこのことも同様に、反省を生み、次なるチャレンジへの意思を生み、結果的に自分を成長させることに繋がります。

礼拝での音楽の挑戦が、結果的に豊かな礼拝を生むことになると同時に奏楽や賛美奉献をする学生一人ひとりの自己成長も生むことになるので、学生の皆さんには大いに挑戦して欲しいと思います。そして、礼拝がより豊かになることを願って止みません。

（二〇一六年二月二四日、二〇一五年度「全学礼拝懇談会」発題
テーマ「より豊かな礼拝を目指して―礼拝音楽をめぐって」）